

## 16. 脾シンチフォト24時間像の臨床的意義

平木辰之助

(金沢大学 放射線科)

久田欣一

(金沢大学 核医学診療科)

1967年1月より1970年2月の4年2カ月間に脾頭部腫瘍が原因となって閉塞性黄疸をもたらしたと疑われた18例の脾シンチフォトを分析した。

18症例の年令は31~79才で男性13例、女性5例であった。閉塞性黄疸の原因が悪性腫瘍で脾シンチフォト所見上明らかに space occupying lesion を指摘できた症例は14例中13例であったが Vater 氏乳頭部癌では space occupying lesion を指摘できなかった。

従来より閉塞性黄疸の診断には  $^{131}\text{I}$ -ローズベンガル

や  $^{131}\text{I}$ -BSP が用いられていたが、閉塞部位が脾頭部付近にある場合はその原因が悪性腫瘍によるものか結石その他の炎症性病変によるものかを鑑別できなかった。われわれは脾シンチフォト24時間像で観察したところ、悪性病変が脾頭部や Vater 氏乳頭部に存在した症例では全例24時間後も明瞭な脾の RI 残留状態を認めた。しかし肝、胆道の慢性炎症や胆管膨大部結石の1例では脾シンチフォト24時間像で RI が脾臓に残留することなくすでに腸管内に移行していた。

閉塞性黄疸の原因となった脾頭部および Vater 氏乳頭部病変が悪性か否かを鑑別する補助診断として脾シンチフォト時間像が将来臨床上非常に有用な情報として役立てるであろう。

\*

\* \* \*

\*

\* \*

\*

\*

\*

\*